自然哲学を失った現代の政治家達

「政治家像が変わらないと日本は立ち直れない」

東京理科大学教授
坂口謙吾

私は政治家ではない。何十年も基礎の自然科学の領域にいた分子生物学者である。もちろん政治家になるつもりもないし、そんな年齢でもない。もっと無責任な言い方をすると政治にたいした興味もなく市井の市民として年老いた自然科学者に過ぎない。でも歴史好きで、かっての大政治家と呼ばれた人達や歴史上の英雄達と比較しながら、**“自然科学者の観点”**から政治を見る癖がある。

20世紀を通じて、日本には時代を画する大政治家は出ていない！何故か？
現代の政治家には大きく欠けているものがあると思う。**“自然哲学”**的な教養である（自然科学ではない、お間違えなく）。

さる私の友人が吉田松陰という（明治維新を創った日本史の真の）英雄を評して言った。

１）士籍剥奪・世禄没収の処分（保身我欲無し）
２）享年30才（国運に命を賭ける）
３）「至誠にして動かざる者は未だこれ有らざるなり」（数ケ月で天命の時が来る）
４）辞世の句は“身はたとひ 武蔵の野辺に朽ちぬとも 留め置かまし 大和魂”
（日本人のアイデンティー）

まったく政治家の鏡と言うべき人物である。

只ここで評価されているのは、松陰自身の現実政治の中の生き方に関する信念に過ぎない。私はそれだけではないと思う。それだけでは只の多くの幕末の志士の一人にすぎないことになる。

彼はもっと次元を超越した英雄だった。

彼は19世紀前半の最先端の**自然哲学**をごく自然に身につけていた。あの幕末の世の情報不足時代に既に産業革命の存在とその重要性を理解していた。その判断力は「**時代を超越し未来を透徹**」していたといえる。幕末から明治初期にかけて登場した政治家達のほとんどが明治維新に命を賭けた。上記の１）ー４）の精神は吉田松陰や一部の英雄だけに限ったことではない。その維新の志士達や優秀な幕府の政治家達のほとんどが、過去の歴史を参考にして政治の判断していた（志士に限らず、どちらも大いなる秀才達である）。その中で、ただ一人未来を透徹出来る教養を持っていたことが、彼をして維新の志士達の手本とし指導者とし、更には歴史上の英雄にし、今日の日本を創る礎になったと言える。

私はその友人に以下のような返答した。
「今こそ、現代の政治の世界に是非とも蘇らせたい人物である。現代の吉田松陰候の出現が待たれます。我こそは第二の吉田松陰、と唱える政治家も過去に多数いたと思うし、現代にもそれを目指す人もいると思います。しかし、話を聞くと何かもの足りないものを強く感じています」。
「評するに、現代の政治家は、総理大臣クラスでも“自己保身が最優先”がほとんどの由。でも、私の印象では、これは多分もう少し根が深いと思います。“自己保身”と言うよりも“言い訳”が優先しているので、そう見える。“無知のため［肩書き経歴に頼って諮問の“専門家”を選び］、彼等に［訳も分からず迎合］、その結果［うまく行かぬ状況］が毎度出現、その失敗を突かれ［言い訳］をする政治家”の方々という方が正確ではないでしょうか」。
この［うまく行かぬ状況］出現の度に命を賭けていたら、命が幾つあっても足らない状態に陥る。政治家の神髄たる乾坤一擲の状況判断は皆無となる。［言い訳］政治家の大量生産（みっともない！）。

友人からは沢山質問された。

＊　無知のため［肩書き経歴で“専門家”を選び］
＊　その“専門家”に「訳も分からず迎合」、
＊　その結果が［うまく行かぬ状況］の出現、
＊　失敗を突かれ「言い訳」をする政治家
要するに“無知”が招く連鎖反応の結果である（実は、これは20世紀を通じて多くの政治家に同じことが言える）。吉田松陰候が同じく無知だったら、歴史はならなかった筈。それなら私の言う“無知”とは何か？何が無知なのか？

自然哲学である。吉田松陰にあって他に無いものは自然哲学である。

少し回り道をして話を述べよう。
「吉田松陰は19世紀半ばの英雄である。もし同じことを戦国末期に言い、16世紀に松下村塾を創り若者を教育すれば時期尚早だっただろう。大政治家・英雄はその時代の背景を理解し創り出されるものだと思います。時代の背景とは政治経済社会だけの話ではなく、その時代の自然の摂理（森羅万象・地球の在り方・人類の在り方・人間の在り方・時間とは）を“自然哲学”として理解していたことが重要なのでしょう。16世紀には16世紀の最先端の自然哲学があった。これは時代と共に変わっていく。なぜ、織田信長が戦国を変える英雄で、なぜ、“義”を唱える上杉謙信が人物像を称えられながら歴史を変える英雄ではなかったのか？」。
「“義”などというモラルは、過去の政体を維持するために創られた儒教の詭弁である。もし上杉謙信が中心に躍り出て活躍したら、本人の“美観”は称えられ尊敬され武士の鏡と化すだろうけれども、戦国は限りなく続き、民衆は苦しみ、社会は荒廃し、彼亡き後は衆愚政治と化し、最後は清朝末期のごとくになり、産業革命に成功した先進国

の植民地となっただろう。“時代遅れ”、人の生き方の美学であっても絶対に社会経済として現実になってはいけない！」。

「上杉謙信には儒教的モラル教養はあっても、新世界を理解出来る自然哲学はなかった。これらの教養は古代ギリシャに始まるアリストテレス以来の考え方である。自然の摂理を理解し、政治の背景にそれを取り込みながら、ものを考えることである。これが近世に至りルネサンスを生み産業革命を生む素地となったのである。一方、東アジアでは儒教が基準だった。そこには自然哲学が欠けている。これがヨーロッパとアジアの近世近代の差を生んだ元である」。

「そして19世紀には、世界は既に産業革命を経ていた。多くの幕末の政治家の発想は、幕府側・新政府側を問わず（今の政治家そっくりの）矮小化した秀才の世界だった。個々の人材を見れば、どちらも私利私欲に走っているものは少ない。むしろ、心は“義”に生きた上杉謙信を連想する。だからこそ、どの人物もテレビの大河ドラマの主人公足りうるのだろう。この時代を感じていた人たちは（今の政治家そっくりで）やはり誰にも自然哲学発想はなかった。外国の政治経済事情知識ばかりでなく理科的技術的な知識全てに不足を感じ、やったことは（今とそっくり）“専門家”を集め断片的知識を仕入れる、その僅かばかりの即席知識を開けかし、政治の前面に出す（あとからみると極めて陳腐）。それが歴史を狂わせ日本の宝、吉田松陰の命をも奪ったのである」。

（陳腐のごく有り触れた一例）水戸斉昭いわく（攘夷撃ちを発動するために）「夜陰にまぎれて、後ろから這い上がり、敵の軍艦を襲い奪ってこっちのものにすれば、水軍力アップになり、もはや敵の蒸気船を恐れることもなく戦え、攘夷撃ちは近代化も兼ねて、一石二鳥ではないか」。こちらには蒸気船を操舵する経験者もおらず、宣戦布告もなく襲えば海賊行為と見なされる（通告などしておいても、相手はまともに対応していない）し、植民地化される口実を与えたろう。エンジン付きの船を造る技術や産業という概念もない。彼はその時、水戸学のボスとして幕府中枢では近代戦の戦術家の顔として通っていた。

勝海舟は腰を抜かして呆れたろう（ちなみに、後に彼は艦長として咸臨丸でアメリカに渡ったが、その際、ずっと酷い船酔いでベッドに寝込んだまま起き上がれず太平洋を渡った。指揮操舵は同乗したアメリカ人船乗り達に頼りきり全く何も出来なかった。大河ドラマとは全く違う姿である）。水戸斉昭の机上の空論が如何に馬鹿げているか、腹が立ったに違いない。

いろいろな違う事象に対してだが、今、この水戸斉昭に類した馬鹿げたことを言う国会議員は非常に多い。水戸斉昭を笑うことは出来ない（今の国会議員達の、その無知ぶりには、驚かされることが多過ぎる）。福島原発の対応がよい例である。最初に、私は自分が分子生物学者であると書いたが、詳しくは“放射線生物学”を専門とする分子生物学者である。そのあまりの陳腐さに笑うしかない！

分からないことは、その道の専門家に聞く。当たり前のことである。

しかし、今の実態は、その当たり前が形骸化し「そんな者は（社会は完成しているのだから）探すに及ばない、肩書き経歴素性がハッキリしている“専門家らしき者”を誰

かが集めてきて（いや、集めてこさせて）、“専門家らしき者”に勝手にやらせて言い分を書かせ、人前ではそれを読めば良い」。時間と共に更に形骸化が進み、そのパターンを踏襲、ついには“専門家らしき者”が全く何かも分からず選び、言った通りに政治を為す。
　自分が判断する思考の基礎基盤さえ失っているのである。

　今、日本の政治家達（いや、20世紀の日本の政治家達全て）にもっとも欠けているものは、この思考の基礎基盤となる自然哲学である。日本の政治家達のモラルは呆れたことに、極めて“儒教的”である。多くの政治家は、最初は“自己保身が最優先”だったのではなく、上杉謙信だったのである。
　例えば、理系の分からない専門的なことは専門家に聞く、あるいは専門家委員会を立ち上げる（３・１１の原発事故をみよ）。あまりにも無知で、選ぶ“専門家”がよく分からないので、人任せで肩書き経歴で選ぶ。そして、失敗が発生すると“言い訳”する。

　図式は、無知 → 他人任せ → 失敗 →“言い訳”→“自己保身が最優先”。

　英雄に“言い訳”など不要である（上杉謙信は“言い訳”は絶対にしなかった）。

　私は思う。20世紀以後、日本の政治家は大いに矮小化した。それはあらゆる学問領域が専門化し細分化していったことが大きいと思う（“無知”の基になった）。幕末にはいなかった“専門家”と称する集団が政治の世界に割り込むことになる。この集団、自分に都合の良い時には“疑似政治家”と化し、都合が悪くなると“専門家”に逆戻りして穴に閉じこもる。政治家は自分の無知から、経歴肩書きに騙され、失敗と共に逃げられ、責任を押し付けられ、“言い訳”政治家に成り下がる。
　日本の近代史はこの歴史である。（例外の時代、吉田松陰とそれに続く人材に薫陶を受けた人たちが支えた日露戦争までを一区画として）、それ以後、良く言えば儒教的、悪く言えば“専門家”に騙される無知の政治家達が日本を支えている。総じて儒教的モラルといえども、上杉謙信ほど徹底していないので、“言い訳”が出る。ある意味で被害者とも言えるが、被害者ではない！

　友人への返事を続けよう。
　「その松下村塾の故事に習ってつくられた近代の塾は多い、例えば松下政経塾は非常に敬意を表されています。しかし、もし今一度、現代の松下村塾を創ろうと思う方がおられるのなら、松下政経塾と同じでは限界がありますよ。時代は変わり、政治家自身が現代に要求されている（21世紀の）“自然哲学”を熟知する必要がある。“他人任せの無知”は、自分に罪はなくとも不本意にも上記の図式を生む。基本的に本人の無能につながる」。
　「今の時代に当てはめるなら、政治家が真の“大和魂の持ち主”で“保身我欲無し”で、かつ“国運に命を賭ける”人なら、彼が選ぶ“専門家”も同じ信念の持ち主でなけ

ればならない。あなたは経歴肩書き友人以外から、そういう“専門家”を選ぶ術を持つか？」。
　壊れた原発への海水注入の善し悪しを総理が聞いたという委員会は、そんなことは言っていないと言う（途中で、言い方が違っていた、と言い直した）。総理はそれに基づいて中止させたという。
　自分が創った委員会で自分が選んだ“専門家”達である（総理の方は「私は面識がなかった」と“言い訳”した。上杉謙信ならその“専門家”の首をなぎ払い、自分は切腹しただろう）。

　「吉田松陰には19世紀前半の最先端の“自然哲学”があった。彼はあの幕末の世に“産業革命”の歴史的重要性を理解していた。彼が一人で、どのようにして理解するに至ったのか不明だが、凄い。それがゆえに只の幕末の勤王の志士、只の政治家ではなかったのである。只の“大和魂の持ち主”ではなかったし、只の“保身我欲無し”で、只の“国運に命を賭ける”だけの人ではなかったのである。その背中を見て何かを感じ、沢山の優秀な人物がついていったのである」。

　「彼は“無知”ではなかった」。
「あなた自身が“無知”でなくなる必要がある」。

　それは“自然哲学”という教養である。全ての政治判断の基礎である。
“自然哲学”？

　Wikipediaによれば、
　自然哲学とは、形而上学が物質世界の背後にある原理、すなわち神などを扱うのに対し、自然哲学は物質的世界を研究する学問である。アリストテレス以来の極めて古典的な話である。
　だが、科学者などはつい、自然哲学を「現代の自然科学の前身となったもの」などと、解説してしまうことが多い。
　かつて、自然科学の歴史の研究（科学史）などにおいては、広範囲に及ぶ自然哲学の中から現在の自然科学と重なる部分だけを限定的・恣意的に抽出して考察することを行いがちで、そういった恣意的な考察では、「自然哲学」は「自然科学」のほぼ同義語として用いられることになった。抽出されているのは、主にルネサンス以降の"近代自然科学"の確立期から19世紀初頭までの間の"自然"（今の自然科学者が言う意味での「自然」）に関する諸考察などばかりである。これでは自然哲学のごく一面を描いているにすぎない。現代の自然科学関係者が解説すると、どうしても現代の自然科学（端的には現在の自分の説）につながった部分だけを美化・称揚し、現在の自然科学の説・自説に合致しない部分を抽出しこきおろすことによって現在の自分の位置を美化したり、あるいは自然科学と関係のない部分はまったく無視して記述すらしない、ということになりがちだが、このような態度では自然哲学のありのままの姿を描き出すことはできない。このようなしばしば科学者にあった、そして現代の科学者もしばしば陥りがちな、歴史に関す

るデタラメな見解はホイッグ史観と呼ばれており、科学史においても（また一般の歴史考察においても）そのような態度に陥らないように十分に注意することが必要だ、と警告されている。

何か難しいですね。
そんな難しい話をする必要はない。簡単な言葉で言えば、
「**現代を構成する背景の科学技術、政治経済ビジネス、人間、地球環境、そして46億年の地球現象や38億年の生命進化を背景とする事象を、自然の摂理として総合的に理解する基礎の考え方**」である。
もっと分かり易く言えば「**相手がなんであろうと、人が言ったことを正しく“想像”し判断できる思考の基盤**」である。

個々の理科的知識・経済学的知識を断片的に山ほど覚えることではない。底に流れる共通の真理を理解することである。これがあれば（理系であろうと文系であろうと何であろうと）専門家と称する集団に騙されることもなく、人物の見識の差を見分けることが出来るであろうし、肩書き経歴に騙されることもない。また自身の政治哲学の基本となる。
如何なる自分の知らない領域であろうと、所詮、人間のやっていることである。政治家たらんとする有能な人物が“想像”出来ないことなどない。今のごとく、無知から来る“人任せ”ではいけない。原発事故はその見本のようなものである（この事故のていたらくぶりが、この文を書く気にさせた動機でもある）。

なぜ吉田松陰が民主主義のような政治体系の重要性とならび、産業革命やルネサンスの発想の重要性を理解していたのか？

同じ現象を20世紀に当てはめると非常に分かりやすい。20世紀の日本の政治家達は“20世紀の自然哲学”を理解していなかった（彼等は英雄ではない、全て２流を意味する。戦争に引きずり込まれた戦前の政治家は、それだけで既に全員が４流あるいはそれ以下の屑である）。
簡単な分かりやすい例を示そう（これが全てではない）。

1929年にペニシリンが発見され、そして1940年には実用開発化に入った。政治家の立場から普通に見れば、これは只の医学的発見の1ページに過ぎない。押し広げてもせいぜい科学的発見のトピックスである。その時点で、政治の世界と結びつけて考えた政治家は皆無（！）だった。ただ世界中の人達が喜んだ世紀の大発見であったに過ぎない。政治家達の理解も全く同じだった。これが、20世紀の歴史の転換期だったことを誰も理解しなかった（本質的には、未だにそうかもしれない）。20世紀が紆余曲折した悲劇の時代だったことは歴史家の認めるところだが、これはたまたま避けられない歴史上の一時期的局面だったのではなく、この矮小化した政治家達が創り出したのである。ペニシリン現象を理解する政治家がいるだけでも世界史は変わっただろう。

自然哲学的な見方をしてみよう。

ペニシリンの発見は、それに引き続く多数の抗生物質群の発見を導き、数年以内にほとんどの伝染病の治癒をもたらすキッカケとなった。**ペニシリン発見と同時に、それは予測された。**

伝染病、それまでの人類5000年の文明にとって最大の恐怖だった。人々の死因の90%以上がこのような感染症だった。人種・年齢・性別・身分・貧富の差に無関係に、人を“突如”“旬日”のうちに殺傷した。ところがペニシリンの出現は、若者達にとって「人間いつ死ぬかもしれない、何事も為すべき時に為さねばならない」という“死生観、覚悟”を不要にしたのである。

5000年間なかった“歴史”の転換が突如起きたのである。史上例がないので参考にする政治的な事例はない。そして、その人類の歴史始まって以来の巨大な“歴史”の出現を、“歴史”と理解する政治家はゼロだった。

ゼロということは、結果的に起きる筈の“歴史”的事象を誰も分からず、政治を行ったことになる。そのため、いつも失敗し“言い訳”せざるを得ず“自己保身を優先”する政治家ばかりを生み、民衆に不幸をもたらすことになった。

5000年間なかったことが起きたのである。つまり、5000年の政治の歴史的常識が“通じない”政治的事象が直後に頻発する筈。何故、そのくらいの想像ができないのか？もし吉田松陰が20世紀の政治家なら、彼は自然的に“20世紀の自然哲学”を身につけていただろうから、予測したかもしれない。いや、しただろう。産業革命も5000年間起きたことはなかった史上初の“歴史”的事象であった。産業の現場を見聞すれば誰でも忽ち納得することだが、それを江戸時代幕末、あの情報不足の時代に（日本にいて）的確に予測していたのである。もっと知るために自ら渡航しようとさえした。

ペニシリンに戻る。死因が減れば何を起きるか？ここからは政治家の世界である！

＊当然、過去5000年間にはあり得なかった「人口爆発」が起きる。

＊それも幼児死亡率の激減から始まる。

＊死生観の大幅変革をもたらし、若者のモラルが劇的に変わる。

＊現在の文明は産業革命構造から出ていない、つまり、地下資源の乱掘と消費が始まる。

＊国際的な食糧不足と飢えをもたらす。戦争よりも分配の公平、食糧増産、必死の経済の拡大活動、地下資源の獲得競争、になる。最初は先進国と後進国の格差が広がり、ついで後進国に同じことが起きる。

＊最初の30ー40年は若年労働者の桁外れの増大が起きる。つまり1950ー2000年代。先進国から順番に高度成長になる。

＊そして、50ー70年後には高齢者人口の爆発をもたらす。21世紀初頭ー近未来。同じく先進国から順番になる。

＊この循環は徐々に後発国に移り、高度成長が続いていく。人口爆発と高度成長は幾何級数的に拡大していく。経済の拡大は地下資源の乱獲、地球全体の自然破壊を

もたらし、必ず限界が来るまで全世界に波及し、最後は破局に至る。

＊人にとって「長生き」することが、結果ではなく目的に変わる。世界中に生き方の美学、価値観の喪失が起きる。人口爆発と共に破局に向かっていく中、このような人間が大過剰に蔓延り、新しいモラルの構築が急務となる。

＊全世界的な同時モラルの構築は不可能な作業だから、世界中に拝金思想と利己主義が極端な形で蔓延る。当然、国際政治も影響される。

＊戦争の形態は変わり、先進国同士では経済戦が最優先する（若者は単純に長生きすることが最大の目標だから、先進国から順番に、戦場が出現することを忌み嫌い、何事も他人任せの風潮が蔓延る）。総力戦は生じなくなる。

＊一方、古典的な観点に入る戦争形態、紛争形態は後進国に頻発する。そう言う国々でも人だけは死ななくなるから徐々に人口爆発になっていく。その移行途上では極貧なので19世紀後半20世紀前半に起きた国家間戦争民族間戦争が頻発する。高度成長の波及の順番で、後発度が下がるように全地球的に移行していく。

＊特に地下資源生産国は、矛盾が吹き出しやすい。先進国形態の社会条件が揃わないのに、人口爆発は起き、金だけは集まる（当然激しい紛争が起きる）。これは地下資源不要の時代の出現と共に終わる。

＊これらの矛盾を解決する短期的な方法は技術革新であり、それは地下資源依存構造からの脱却技術である。今熱心にやっており進みつつある。しかしこれは姑息な目先の話にすぎない。

＊人口爆発の極限は、A)最終的な戦争か、B)人類の滅亡か、C)破局分析を正確に行い平和的に新時代に移行か。それは気づく時期に依存するだろう。

＊（蛇足）不可能と考えられたことが実現できたのだから、他の病気もそうなる。癌や血管障害、認知症の治癒も起きる。その時の平均寿命は100歳に達する。この医薬品による「人口爆発」の悪循環は、放置すれば人類滅亡をすぐ目前にし、滅亡するまで続く。

これらは今も進行途中にある。行き着くところまでいかないと終わらない。放置すれば必ず“民族の滅亡”“国家の滅亡”そして“人類の滅亡”に繋がる。その時間はもうない。人口が100億人を突破する現代という時代のうちに起きるだろう。地下資源依存構造からの脱却技術の開発など目先の話でほとんど解決にならない。今こそ政治の時代なのである。

これを冷静に見れば、1940年には予測出来たのである。もし人口爆発がなければ、その後の歴史の進行は、それまで同様にゆっくりと進み、今より１ー２世紀は遅れていただろう（あるいはもっと）。この歴史の劇的な進行を予測し、これに対応した政治が行われておれば、又、違った今日があった筈である。

例えば、日本では、早くから長寿が予測出来たのだから、戦後世代に“過去に長寿となった模範足るべき人たち”のモラルを説き（修身道徳の話ではない）、ただ単に長生きすることが目標でない目印を大衆化しておく（今、日本人はいたずらに馬齢を重ねることだけが人生の目標なのである。情けない話である）（当然、頽廃と犯罪とモラルの

崩壊が蔓延る）。高度成長の時代に、人口爆発を的確に予言しながら起こり得る事態を予測し説き、新しいモラルを説いておれば（難しいことではない）、その政治家はその時はバカにされても最終的には尊敬されただろう。当然カリスマ性も増す（吉田松陰の再来）。1980年代の浮ついた高度成長の成金発想を抑えて1990年代の破滅も最小限にとどめたろうし、今の猫の眼のように変わる総理大臣政治は生まなかったろう。さすれば財政危機も予期される前に解決していたろうし、介護システム年金システムの破綻も防げたろう。今の人口減少もなかった。

今の若者には、人生の目標も生き甲斐も何もないのである。只ズルズルと無為に長生きし、ただ毎日を生きるために金を稼がねばならない、という理由のみで職を探しているのである。そして前途には日本の衰退縮小の予感しかない。哀れな話である。政治の不在と民族の滅亡の前兆と見るしかない。

江戸末期も同様だった気がする。だからこそ時代を変えようと志士たちが出た。そして明治の世、若者達には希望があった。今は社会制度の問題ではない、人口爆発から来る問題である。全世界的な発想の基盤と考察によって解決しないと何も出来ない。国際政治家が求められているのである。織田信長の時代と吉田松陰の時代、そして今の時代それぞれに求められているものが違う。スケールが全地球的に巨大化しているのである。あなたは世界から尊敬を集める国際政治家でなければならない。

さて、話を元に戻そう。この人口爆発は、実は18世紀の産業革命構造の終わりを意味している。石炭石油と鉄に依存した構造は過去200年以上変わっていない。産業革命は最後には人口爆発を誘発する。皆、経済の増進しか頭にないが、ペニシリンの発見も結局その一つなのである。

今も歴史の進行は政治家の予測を遥かに上回っている。中国インドの石炭石油と鉄の消費量は10ー20年もしないうちにカタストロフィーレベルに達する。カレンダーに書けるような時間が正確に分かる“歴史”の必然である。それに対する対処法は全く出来ていない。

人口爆発は次に何をもたらすか？上記の人間の世界だけの問題で解決しない。誰もが忘れているが、人類も地球に誕生した生き物の１種に過ぎない。“数”の幾何級数的な増大は、すぐ目の前の、差し迫った“種”の滅亡の前兆なのである。良く叫ばれている環境破壊は、実は“破壊”ではない。不要となった“種”を滅亡させるための地球の是正運動なのである。

政治家は、そういう自然哲学を理解した上で新たな政策を進めないと「“言い訳”だけの滅亡への道を促進（あるいは、只の傍観）する政治家」になる。言い訳をしても滅亡を避けられる訳ではない。人類の不幸をもたらす無能に過ぎない。

そんな長期にわたる大局的な見方など夢の又夢、今の世、たかが原発事故一つで全員が言い訳をして何も出来ず、みっともない話である。自然哲学があれば、こんなこと一つなど訳なく理解出来る。

汚染冷却水の処理が出来ない！困る！みーんな同じような“専門家”を集めて曰く「世界の叡智を集めても分からない」。バカとしか言いようがない。同じマスコミが、放射能物質が、やれ甲状腺に集まる骨に集まる内部被曝だ！癌になる！と騒ぐ。その通りである！骨を持ってくればプルトニウムが強烈にくっつき集まるのである。ゼオライトという土が放射能物質を吸着する（私達には常識）が、この物質は骨も吸着する。骨は人間だけにあるのではない！脊椎動物は全部持っている。牛の骨、豚の骨、鳥の骨、魚の骨、皆処分に困っている。アッという間に汚染水は浄化が可能である。別に骨に限らない。生き物の成分は調べれば何でもある。生命に“危険”なのはくっつくから危険なのである。一方、汚染水は水に溶けて流れ出すから危ないのである。何かにくっつければ流れ出さない。

こんな疑問なぞ、政治家の皆さん、あなたが理系の専門家でなくてもすぐ思うでしょう。そうすれば、そのような専門家をあなた自身が捜すでしょう。それが**自然哲学**である。それぞれの“専門家”達が分業細分化して後、１世紀以上経つ。“専門家”達自身が自然哲学を失っているのである。肩書き経歴さえもが100年の時間は形骸化させたのである。

政治家自身が原点に還って“自然哲学”を身につけるべきである。今、もはや“専門家”なぞ“専門家”ではないのである。只のご用聞きに過ぎない。彼等を使うのは政治家である。教えていただくのではない！

繰り返すが、現代の“自然哲学”とは？自然科学の底に流れる自然の摂理、その時代の森羅万象・地球の在り方・人類の在り方を、その時代に合わせて理解し表現出来ることである。そして自分の理解に基づいて、自分が「不思議だなあ」と思うことを、ありのままに表現出来ることである。自信無くフラフラと疑心暗鬼になることではない。その上で、個々の専門家の話を理解すればよいのである。政治の考え方全ての背景となる基礎理解、基礎知識と言える。どんなに“専門家”が強弁しようと、たとえ少々の疑問でも感じたら、正々堂々と「自分を理解させるよう納得出来るように説明せよ」と反論する力である。

直感的に分かるようになる。出来なければ政治家になるべきではない。

吉田松陰は19世紀前半の最先端の自然哲学を自然的に身につけていたと思われる。現代の吉田松陰は、21世紀の自然哲学を見つけていなければならないと思う。私は次のように友人に述べた。

「現代の“自然哲学”が持つ“自然科学やビジネスの基礎知識と先進性”の伴わない吉田松陰、これだと今では、中東や東欧諸国の英雄と同じですよ（世界のリーダー、人類のリーダーではない。時代遅れのリーダーです。その時代の国民の知性や教養を反映している。今の日本人はもっとレベルが高いです）。要するに“無知”である。先進国の中の優位な政治家には成れない」。

先進国（日本という言葉に置き換えても構わない）に起きた過去70年間の政治経済文化生活の歴史的な事象をこの数字を見れば一目瞭然。ほとんど誰にでも分かるような理屈に過ぎない。政治とは人の集団の統治である。集団の一番の基礎は“数”である。何時でも予測できた。だが、これを予測して政策を提案した日本の政治家は皆無である。現代の混迷はこの政治家の無能から来ている。誰一人、ペニシリン以前の政治から出られず、情けない話である。出てくる話と言えば、吉田松陰候、坂本龍馬などの歴史上の英雄達の話である。確かに、この英雄達は自分の利益を考えず日本のため身を果てさせた。「私もそうありたい、自己の利益など省みない」そう言う政治家は今も多い。素晴らしいことである。

しかし、気持ちだけで政策の本質が見抜けなければ、新撰組と何ら変わるところがない。真理を理解せず浅薄な知識を振り回して、自分の美学のみに生きる人材が政治家として政策を実行するのは、NHK大河ドラマの主人公としては面白くても、同時代の国民にとって悲劇に近い。幕末に浅はかな知識のみで有能な人物を暗殺して歩いた連中と同じである。本人達は大義に生きているつもりで命を賭けていた。今の政治家を見ているとそのような人物の集団の印象が強い。述べたような、自己都合「保身の術」と言うより、”無知のため「訳も分からず迎合」その結果の「言い訳」政治家”の方々に成り下がっている。

今の彼らに何が足りないのか？理系の断片的な知識を与えるアドバイザー（いわゆる“専門家”、そして何とか委員会）ではない。本人自身が持つ自然哲学の見識である。政治家は博学多才の学者になれ、と言う話をしているのではない。そんなことは今の時代には不可能である。背景に流れる基礎の考え方の見識である。

自然哲学の世界（教養）。その時代の背景となっている森羅万象・自然の摂理を理解する基礎力である。松陰には19世紀前半の素晴らしい教養があった。今政治家には、自然の摂理を理解する21世紀の教養がいる！

たまたま、ペニシリンの話を書いたので時間をもう少し引き延ばしてみよう。

人口爆発は先進国から始まり、時間差をおいて、そのルールは人の集団のあるあらゆるところに波及していく。あなたは地球の生産力と人間の数の限界を考えたことがあるか？

食糧生産と人口の割合ではない。根本的に考えることである。地球の生命は炭素化合物で成り立っている。生命は生命を食する以外に生存は出来ない。それは“「食物連鎖」のピラミッド”に従って生活している。中身はどうでもよい。炭素原子の割合は、1種類の生き物が全部占めたら生存不能である。地球的循環の中で割合が成立している。人口が増えることが出来る割合の限界がある。地球循環的に見ると、現代条件下の計算でも10ー20億人で既に大過剰である。もし農耕がなければ、人の数の限界は全地球的に見ると500万人以下である。貴方はこの数字がどこから来るか理解できますか。おそらく吉田松陰は理解できたと思う。これは19世紀前半の自然哲学でも可能な話なのである。日本の現代の政治家にそう言う人物はいるのか？

今、世界の人口は（21世紀初頭段階で）毎年１億人づつ増え続けている。予測では、21世紀半ばまでには簡単に100億人を超えるだろう。未来の話ではない、その頃、今の若者はまだ50代である。増大は比例ではない、生き物の環境適応増加は、必ず幾何級数的になる（人間も生き物である。必ず“生命38億年の掟”に従う）。数の増加には、必ず“増加を抑える掟”もある。従って、21世紀末の人口予測は不可能である。“増加を抑える掟”、これが何か？私が言う必要はない、真の政治家の考えることである。

この観点から、今、日本人が享受している環境を、中国インドに20~30年以内にもたら“そう”としたら、どうなるか？

現在日本人並みの生活を享受しているのは世界人口の８％程度である。ここに中国インドが加わると世界の40％の人口がそうなる。現在の大気汚染度・海洋汚染度は現状このままでも５倍になる。インドネシア、ブラジルなどが追いかける。その構造は18世紀の産業革命と基本が同じだからである。産業革命も今も、工業技術も経済も構造が同じなのである。

その技術革新（石炭石油や鉄のごとき地下資源に依存しない代替え技術）は桁外れの速度で起こらねばならない。さもなければ、中国インドの拡大は、近々、人類は滅びるより他ない事象の始まりである。これは21世紀初頭、今の話である。生き物の自然淘汰とはそういうものである。

上記の技術革新、話題になれば、石炭石油や鉄に変わるものを創りだす代替え技術があると称する“専門家”が忽ちゴマンと溢れるだろう。あなたはそれを識別出来るか？時間的に間違えたらお終いのワンチャンスだろう。

これは単にペニシリンの話一つによってもたらされた歴史に過ぎない。

“増加を抑える掟”そして、もう一つある。あらゆる生き物は自分のテリトリーを確保し増大させる（つまり、自分にとって快適環境を創る）。人類の快適環境は、18世紀産業革命以来、地下資源の利用で劇的に増えた。アメリカ・西ヨーロッパ・日本・中国・インド・インドネシア・ブラジル、etc、“人口爆発”と“快適環境の追求”は行き着くところまで行くだろう。そして、更にその上に“生命38億年の掟”が出現する。極端に急速な増大は必ず滅亡をもたらす。

解決せねばならない。政治家の発想では、戦争に備える、あるいは政治的な協議によって解決する。それだけになる。それだけではないとおもう。ペニシリンで起きた話である、自然哲学的に考えようではないか。

とにかく目先の問題は、産業革命構造を変えれば良いだけの話である。鉄に頼らず石炭石油を使用せず、地下資源を使用しない。産業革命以前の生き物は地球循環の中で生きていた。それでも人類のみ“食物連鎖”から外れ、無限増殖していた（文明が出来る元である。文明とは過剰の数の増大をうまく治める生態系の一変形構造である）。循環を近代化し産業革命以前の地球循環に戻せば良いのである。

＊燃料を石炭石油そして原子力から、バイオ燃料に転換、
＊鉄などの金属素材をやはりバイオ素材に転換、
ということになる。そしてその構造の中で、数の増加と生活の質の向上を諮れば良いのである。
私は現代の分子生物学者である。バイオ燃料、バイオ素材？木や草や糞を燃やして火を起こし、建材や舟材は木材にする、昔の自然に帰ろうよ、などと言っているんではありませんよ。
何をしようと時間と共に、生き物は滅びる方向に必ず入る。自然主義者になろうと宗教家になろうとダメである。38億年生命の歴史の掟である。滅びないように必ず生存本能が働く。それを防ぐ（引き延ばし遅らせる）のが人類の場合は“政治”である。生存本能を合理的に活かし、方向を探し、落ち着かせる。

今、そのスパンの中で“短期”的な解決を目指す21世紀の新しい産業革命が起きつつあるんですよ。それを理解出来なければ政治家失格である。最初の18世紀の産業革命から200ー300年を経て、新しい時代の産業革命です。
地球循環の条件を満たす大量生産ですね。かっての産業革命では、地下資源（約１ー３億年の時間で循環している素材）に頼って成立していた。石炭は３億年前の森林である。石油も同様。鉄は46億年の時間が創った。つまり石炭石油は再生するのに３億年を要する。ところが、今の使用する時間は200ー400年程度（使い切るのは今から100年を要さない）、百万分の一の時間である。循環が天文学的に狂っている。原子力で代替えなど不可能。鉄を溶かすためには石炭が不可欠であり、大気汚染の40％以上がこのプロセスから出ている。
３億年前の森林が出来る以前（約４億５千万年前）は、動物のほとんどは上陸が制限されていた。つまり陸上には棲めなかった。石炭石油メタンハイドレートを燃やし切ったらそうなる、と政治家は何故思わないのか？当然気温が上昇する。1000年前の東日本大震災と同じように過去に大厄災の例がある。
２億５千万年前、大気の酸素濃度は突如３分の１になった。地球上の全生物種の95％が突如絶滅した。気温が上昇すれば、今は海底に氷結したメタンハイドレートが気化する（現在、地球は氷河期に当たる）、酸素に触れれば爆発する。空気中の酸素は劇的に消費される。２億５千万年前（やはり氷河期だった）同じことが起きたと考えられている。
２億５千万年前の大絶滅は、6500万年前の恐竜の絶滅など比ではない（これは単に一部の“動物”が絶滅したに過ぎない。前後で植物は全く変わらない）。この２億５千万年前の大絶滅の前の段階は、物凄い氷河期だったことが分かっている。この氷河期はここで終わりを告げた。そしてその次の氷河期は何処で始まったか？今である。約100万年前から始まり現代まで続いている。そして今急速に終わりつつある。マンモスの絶滅は人の狩猟によると考えられているが、100万年に及んだ氷河期も現代の人類の活動により急速に終わりつつある。それも過去数十年の話である。このままいけば、あと数十年で終焉が来る。

“増加を抑える掟”は必ず何処かで働く。政治家によると石炭石油の不足はメタンハイドレートを掘り出して代わりにするという意見が多い。背筋が寒くなる話である。今福島の原発事故で大きな批判を浴びているが、そこに登場する“専門家”は原子炉の専門家、放射性物質の専門家ばかりである。目先の解決法を述べるばかりで、そこには自然哲学などは全くない。産業革命が行き詰まったら、その方策ではなく、目先の小手先解決（つまり、ボイラーを燃やす代替え燃料探し）のみ。人類の滅亡の引き金になるような発想はしない、という自然哲学はない。

今、社会のリーダー・政治家は・企業家は・“専門家”は、自然哲学としての教養の不足だらけである。

国会を見ていると、専門的なことは学者を集めて何とか委員会を創ればよい。ではどうやって“専門家”を集めるのか？経歴・肩書き・友人（あるいはその知己）、本当に専門家なのか？世にうまい言葉がある「本物か偽物か」。あなたに見分ける能力ありやなしや。

人口爆発への対処法は、短期的には述べたような上記の“技術革新”などである。「バイオなんちゃらの開発」「地球循環のエネルギー理論」「地球環境を救う」、どれもこれも耳障りがよろしい。しかし、長期的には全く異なる。それは“人口減少政策”である。“技術革新”は誰でも言える話（だから上に書いた）、一方、“人口減少政策”は世界の全政治家にとって如何に難業か（政治家の本懐でしょうな）。もの言えば唇寒し秋の風、誰も言えない。

“人口減少政策”を言えない理由の一端を示そう。

「ヒューマニズム」あるいは「福祉」という言葉がある。政治家が避けて通れない世界である。人のためになることである。弱者をいたわり、みんな仲良く平和で豊かで楽しく暮らす社会、素晴らしいですよね。だから絶対に人口を増やすのを止めようという話にはならない。出産制限など人道に反する。人口の減少は、経済の観点からも国家の衰退を意味し、受け入れられない。

一方、地球全土に100億人が溢れたら、人類と共存できないほとんどの生き物が滅亡するだろう。生き物は相対的な存在である。片方の繁栄は片方の衰退を意味する。片方が衰退すると、最終的に繁栄の極限で残る片方も劇的な衰退になる。人の場合は“滅亡”だろう。200億人は絶対にあり得ない（グラフ上の線をただ引っ張っていけば、理屈上は今世紀末にはその数字を超える）。

「ヒューマニズム」や「福祉」という単語と、「争乱、破滅、滅亡」という言葉が裏腹なのである。バランスをとるのが「政治」ということになる。これは１万年後の話ではない、今の話である。人類学の話ではなく政治の話の段階である。誰が中国インドに向かって「人口を半分にせよ」と言えるか。いや世界に向かって言えるか？日本の中でさえ言えない。

日本は既に人口減少に入っている。放っておいても大丈夫だ、という“専門家”が必ず出てくる（“専門家”というものは本質的に無責任である。“政治家”の立場ではな

い）。38億年の生命の掟は示す。局所的な数の減少は、その地域の種の滅亡を導き（壊滅的滅亡）、他から同種が入って替わる。インディアン、アイヌ人（そして多分、ネアンデルタール人）の滅亡と同じプロセスである。日本の場合は拡大する中国に飲み込まれて消えるだろう。減少を増加に変える政策をとらぬ限り、日本が一足先に滅亡するだけである。

まず、宇宙の成り立ちと地球科学（地学）の原理を学ぶ中で、その次に生命の誕生と進化を学ぶべきである。進化の最終章は人である。その原理を元に人以外の集団の在り方（政治）と生活様式（経済ビジネス）を学び、人に入り、人の政治経済を考察することから始めることである。私の書いた原稿（未だ出版に至っていない）「人類滅亡」はその一端を書いたものである。ご希望あれば、添付するので読んでいただきたい。

政治の背景構築として、基本は「46億年の地球の在り方（昔の地学）、そして生命38億年の在り方（地球循環の生物学）」の理解から始まる（知識用語を身につけるのではなく、理念や発想、概念を知る）。アリストテレス以来の基本である。

教科書はない。教育は雑談から始まる。教える側と教わる側は対等である。師なぞいない。ソクラテスの発想である。いろいろな分野の学ぶに足る人物を、自ら見つけ探して学ぶことである。私自身も、（私が信頼に足る“専門家”かどうか分からないが）私の分かる分野では、一遍そういう教育をやってみたい。

人口爆発問題を伴う今の政治は、政治家が国際化し尊敬されないと進まない。日本の歴史上初の**国際政治家**の出現を望む。

2011年6月吉日